

# 会報

〒183-8534  
 東京都府中市朝日町3-11-1  
 東京外国語大学ロシア語  
 鈴木義一研究室気付  
 東京外語ロシア会  
 TEL 042-330-5268  
 FAX 042-330-5429  
 振替口座 00110-8-22338

## ライフワーク執筆の裏話

中澤孝之



「ロシア革命100年に向けて最大の『タブー』に挑戦する」——一年五月末に上梓した拙著「ロシア革命で活躍したユダヤ人たち」(角川学芸出版)の帯に、亀山都夫学長にお願いして書いていただいたキャッチフレーズである。拙著は歴史書に属する。「歴史とは過去と現在との対話である」とのE・H・カーの名言が思い出される。

実は〇七年春、ロシア革命九十周年記念シンポジウム(ユーラシア研究所主催・明治大学)で、「ロシア革命におけるユダヤ人の役割」をテーマに報告

した。不十分な報告であったが、参加者の関心の高さを感じた。その後、このテーマを念頭に内外の文献を渉猟しているうちに、本邦では類書が乏しいことに気づいた。二〇一七年までにはちよつと早い、自分自身のポケがないうちに、革命百周年を視野にまよめてみようと思いついた。こつこつと原稿をワープロに打ち込む作業を続けた。完成したのがライフワークと位置付けたい六百八ページの拙著である。

ユダヤ問題には、ジャーナリストとしての二回のモスクワ勤務時代(一九六八―七二/七八―八三)から関心があった。ブレジネフ政権下の反体制派の地下活動を取材する中で、ユダヤ系ロシア人の問題に取り組むこともあった。また、付き合いのあった米有力紙の記者たちにはユダヤ系が少なくなく、彼らが代々引き継いでいたユダヤ人仲

ロシアとの齒車	村山 雄樹	3
ロシアマスコミ研修体験記	小菅みさと	4
動き出すかヘメチニコフと天山麓	渡辺 雅司	6
『大学のロシア語』完成に向けて	沼野 恭子	8
府中だより	鈴木 義一	9
ロシア語講座		
『知恵の悲しみ』を振り返って	峯岸 永一	10
ロシア会計報告	前田 和泉	11

間の極秘の情報網を活用し、しばしばスクープ記事をものにしていたのを知り、これでは到底大刀打ちできないと痛感するとともに、うらやましく思った記憶がある。

ロシアのユダヤ人について書くには、正直言つて、相当な覚悟が必要だとの自覚はあった。前記シンポジウムでの質疑応答で、「ユダヤ人とは何か?」といった基本的な問題が議論された。旧ソ連からイスラエルに移住したユダヤ系市民が黒人のユダヤ人を見て驚いたという話を聞いたことがある。ご承知のように、黒人系はもちろん、中国系、そして日系のユダヤ人も存在するのである。

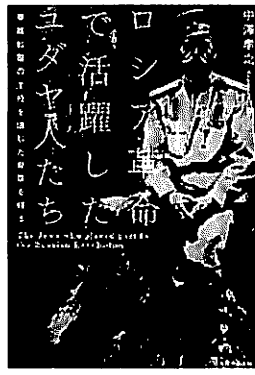
ユダヤ人を知るには、ユダヤ教を知らねばならないことに早々と気づいた。手当たり次第に、ユダヤ教に関する参考書を買集めて基礎的な知識を詰め込んだ。一番参考になったのは、ユダヤ教に改宗した弁護士、石角完爾氏の「日本人の知らないユダヤ人」であった。一般日本人にはほとんど無縁のユダヤ教の戒律について教えられた。第

一章の「ユダヤ教の教え」「ユダヤ人の教育」の執筆に参考にさせていただいた。「ロシアで少数民族のユダヤ人たちが帝政打倒の革命でなぜ指導的な役割を果たしたのか?」のヒントを得ることができたように思う。

そして、革命前のロシア史の中でのユダヤ問題も、革命の背景として把握しておかねばならない。そこでニコライ二世までの十九世紀五人のツァーリにおけるユダヤ人政策を調べた。一番参考になったのは、英国の評論家で歴史家でもあるポール・ジョンソンの「ユダヤ人の歴史」。同書はユダヤ人問題を論じるには必読の書だ。邦訳も参考にしながら原書に取り組んだ。同書はロシアはもちろん世界各国のユダヤ人の歴史を取り上げていて、総合的なユダヤ史の流れがよく理解できる名著である。

「革命の父」レーニンにユダヤ人の血が入っていることは革命当初からソ連では長らく否定されていた。しかし、さまざまな文献により、れつきとした事実であることを確認した。レーニン暗殺を企てたユダヤ人女性フアニー・カプランについて詳しく記述した。ユダヤ人革命家の代表格、レフ・トロツキーの思想を知るうえで、彼の「わが生涯」は欠かせない。また、ポーランド系ユダヤ人で歴史学者のアイザック・ドイッチャーの「非ユダヤ的ユダヤ人」はロシアのユダヤ問題の古典である。革命の背景の帝政ロシア末期

の状況を知るうえで、当時ロシアで十七年間も取材活動をしてきた英「ロンドン・タイムズ」紙のロバート・ウィルトン記者の「ロマノフ家の最後の日々」(初版一九二〇年)の復刻版(一九九三年)を活用させてもらった。復刻版と言えば、一九四一年にリガでナチスに逮捕されたまま行方不明となった歴史家セシヨン・ドゥブノフ(拙著p.二九〇)の名著「ロシアとポーランドにおけるユダヤ人の歴史」初期から今日まで(一九二〇年)も米国アマゾン(インターネット通販書店)から取り寄せた。反ユダヤ的なロシアの文献も何冊か手に入れて読んだ。例えば、ロシア・アカデミー会員で数学者、哲学者として著名なイゴリ・シヤファレーヴィチ教授(一九三三年)の著書「三千年の謎」である。



あれやこれやの参考文献名は巻末に記載しているが、デスクの周りに置いた書籍は約百四十冊に上った。地名、人名の検索では、インターネット(英語、露語)を活用したことは言うまでもない。

さて、処女出版「プレゼネフ体制の

ソ連」(一九七五年・サイマル出版会)以来、アマゾンによれば二十六冊目に当たる本書の特色、と言うか著者がアピールしたい点を以下、列挙させていただきたい。

第一に、有名無名のユダヤ人革命家(出自がユダヤ人である人物)をできるだけ多く網羅したことである。これには、大判のロシア・ユダヤ人百科事典三巻(露語)が役に立った。また、ユダヤ大事典電子版(同)も参考にした。著者の関心事は、彼らがいつ、どこでどのような家庭に生まれ、どのような教育を受け、どんな交友で革命に目覚め、投獄・追放された苛酷な運命の中で、どこでどのような最期を迎えたかであった。分かる範囲で調べた。しかも、男性に限らず、前記カプランのほか、ゲシヤ・グリフマン、ソフィア・ペロフスカヤ、ベーラ・フィグネルなど女性革命家をできるだけ取り上げたのも拙著の目玉の一つだ。

第二は、革命前後に現地ロシアで取材に当たった邦人記者、本学の先輩でもある布施勝治氏の何冊かの古書(そのほとんどを入手した)から、著名な革命家の横顔・印象記を引用したことだ。ヨッフエ、リトヴィノフ、ジノヴィエフ、スヴェルドロフ、ラデツク、カガノヴィチ、ボロジンなどの人物評はジャーナリストの観察眼がいかになく発揮されていて、極めて興味深い。布施記者はレーニンとの会見で、日本の初等教育への関心を引き出している。

第三に、十九世紀の著名な作家によるユダヤ人描写を拾い上げた点を挙げたい。ロシア語を専攻しながらもロシア古典文学に触れることが少なかったが、ゴーゴリはじめドストエフスキー、レフ・トルストイ、チェーホフらの代表的な作品を拾い読みする機会を得た。ユダヤ人が登場する箇所から一部を抜粋・引用した。当時のロシア社会でユダヤ人がどのように扱われていたかの一端を知ることができる。

第四に、怪僧ラスプーチンのユダヤ人秘書アロン・シマノヴィチを詳しく紹介したことである。ロシア・ユダヤ人百科事典の説明を引用するとともにシマノヴィチの著書「ユダヤ人とラスプーチン」にも目を通した。彼が政治家としてのラスプーチンを高く評価していたこと、シマノヴィチを通じて困窮しているユダヤ人たちをラスプーチンが支援したエピソード。これらを省くことはできなかった。シマノヴィチは百五歳まで生き延び、モンロビア(西アフリカ・リベリア共和国の首都)で一九七八年に没した。

第五に、「米国はソ連の助産婦」という言葉があるが、非ユダヤ系米国人によるポリシエヴィキ支援の実態の一部を紹介した。主役はウィリアム・トンプソン(ニューヨーク連邦準備銀行理事)。たまたま入手した「ウォールストリートとポリシエヴィキ革命」(一九七四年、NY)の著者アントニー・サットン(「トンプソンは二十世紀の歴

史で無名ながらも、ポリシエヴィキ革命に重要な役割を果たした。もし彼が一九一七年にロシアにいなかったら、その後の歴史は全く違ったコースをたどったであろう」と記述している。トンプソン紹介は拙著が初めてではなからうか。

第六に特筆したいのは、革命前後からスターリン時代にかけて活躍した秘密警察関係のユダヤ人もできるだけ多く取り上げたことだ。ここでは、ソ連解体後のモスクワで出版された「ロシア秘密警察人名大事典」(諜報と防諜の人物事典)(二〇一二年)「KGBの中のユダヤ人たち」(〇六年)などが大いに参考となった。ソルゲにつながるのあった諜報部員や終戦直後の四五年八月十九日、日本軍将校に殺害されたゲンリフ・リユシコフにも触れた。

最後に、ドミトリー・メドヴェージェフ首相(前大統領)のユダヤ人出自について以前書いた拙稿を巻末に転載したことも付け加えておきたい。彼とその両親、夫人のあまり知られるユダヤ名も記しておいた。ロシア革命から約九十年の時を経て、ユダヤ人が初めて国の最高指導者に就いたのである。エカチエリーナ二世(ドイツ人)、スターリン(グルジア人)に次いで、メドヴェージェフ氏は二十一世紀のロシアに君臨した異色の非ロシア人政治家として歴史に名を残すのであろうか。

# ロシアとの歯車

村山 雄樹

2002年4月、ロシア語で教もろくに数えられない私はイルクーツクへと降り立った。1・2年生のロシア語の成績がオール「可」という劣等生中の劣等生だったわけだが、どうしたわけか日本人のいない場所に留学したいという衝動的かつ無謀な挑戦に当時の教授たちは誰も反対してくれなかったどころか、しっかりとイルクーツクの大学を紹介してくれたのである。風呂は2フロアにひとつしかなく、2時間待ちほざらというロシア人学生寮に入寮。もちろん冷蔵庫もキッチンもない。今思うと信じられないような環境で1年を過ごした結果、ようやく「良」程度の成績レベルになって帰国。1年で得たものはロシア語ではなく、卒論もバイカル湖を題材にするほどのバイカル湖愛。可愛らしいバイカルザラシ、淡水魚では世の中で一番美味しいと信じているオムリ、無数の固有種、三百以上の流入河川がある中、唯一流れ出すアンガラ川。



イルクーツク市内から臨むアンガラ川

留学から帰国後、ロシア語から離れ、バイカル湖からも離れ、流れに身を任せて現在の会社に入社。入社後の配属は国内営業というロシアとはまったく縁のない世界。もうロシア語、いやロシアそのものが自分の人生から消え去って久しかったが、運命のいたずらか、また私とロシアを繋ぐ歯車は回り出す。

5年ぶりのロシアとの再会。海外営業ロシア部隊に配属された私だったが、仕事上ロシア語を必要とする場面はほとんどなく、錆びて無くなってしまっている自分のロシア語力を上司に悟られないよう細心の注意を払う毎日。ときおり訪れるロシアからのお客様の相手をするたびに、あの1年はなんだったんだと自己嫌悪に陥ったりもした。それでも歯車は回り続けて気がつけば留学当時経由地として訪れたハバロフスクへ駐在することに。

商売をしていると民族の起源がビジネス習慣に作用しているのではないかと勘繰ってしまう場面を幾度か経験する。游牧民族が起源であれば短期的なものの方、農耕民族であれば長期的なものの方、ただロシアの場合は一筋縄ではいかないようだ。短期的・短絡的で、自分勝手、非効率で改善意識が

ない。これはロシアでビジネスをしていけば最初に感じることもかもしれない。あらゆる場面でこういった事例に出くわし、憤りを通り越して呆れてしまうことの方が多いくらいだ。ただ、これはロシアの歴史の影響で人々が常に「何が起るか分からない」と感じているので、長期の計画や現在の改善が無に帰すことを恐れているからなのかもしれない。

それでもロシアを嫌いになれない自分がいるのは、ロシア人のウェットな部分が好きだからだ。ウオツカを飲み交わせれば細かなことは忘れて商談成立、困った時にはちゃんと助けてくれる。そういう人と人の繋がりの力がこのロシアには残っている。そしてそれは現代のビジネスの世界では忌むべきこととされていることは、個人的には非常に残念で仕方がない。日本と同様、経営者の世代交代が進み、ドライな関係を好む傾向にあるロシア。すでに若い世代ではウオツカさえ飲まなくなってしまうという新ロシアの現実。その行く末を古き良きロシア人と共にウオツカを歯車のオイル代わりにしながら極東のこの地で見極めるべく毎日を通じて1年半が過ぎたが、さっぱり方向性は見えてこない。さすが奥深い国だと痛感する。

先日ようやく思い出の地イルクーツクを訪問。出張で時間はあまりなかったが、当時の思い出をなぞるように街を散策することができた。当時の面

影を残しつつも、この10年で急速に成長している波がこの東シベリアまで届いているのを見つつ、変わっていない風景やお店を見つげるたびにほっと一息。自分自身の10年間を見つめ直す良い機会だった。



10年前より交通量と車種が大幅に変わったイルクーツク中古車メインだったのが韓国メーカーの新車が増えた

月日は、過去・現在・未来、それを感じるタイミングによって意味が大きく異なる。私にとってイルクーツクへの留学からハバロフスク駐在までの10年間の過去を思い返しても、現在を振り返っても、「人生何が起るか分からない」とあり、おそらく未来の自分も「人生何が起るか分からない」と地球のどこか違う場所でも途方にくれているのかもしれない。結局のところ、「何が起るか分からない」という命題で私とロシアの歯車は外れないように運命づけられているのかもしれない。

## ロシア マスコミ研修体験記

小菅 みさと

2011年6月末から2012年3月末にかけて、ロシアおよびチェコにある放送機関に研修生として派遣された。この研修の主な目的としては、海外のジャーナリストの業務に同行することで自らの見地を深めること、現地のジャーナリストや取材先とコネクションを作ること、ロシア語の向上が挙げられる。半年におよぶ今回の研修について、自分なりにまとめ、振り返ってみたい。

## ロシアにおけるメディア事情

## ① テレビ

ロシア三大テレビ局と言われるのが全ロシアテレビラジオ放送会社(BITPR)・第一チャンネル(Первый канал)・NTV(HTB)。これらのテレビ局ではニュース、ドキュメンタリー、娯楽番組なども放送しているが、特にニュースは政府の影響力が強い。このほか娯楽番組を中心とした Pea TV、TB Itsepp、THY、CTC などがある。そんな中注目されているのが2010年に設立された独立系民間テレビ局 Rossia。するどい政権批判を展開し、主要テレビ局を嫌う若い視聴者層に支持されている。

## ② ラジオ

モスクワにはFMラジオだけでも50局以上ある。イギリスの市場調査企業TNS社のデータによると、FM聴取率で上位を占めるモスクワのラジオ局5局のうち4局は音楽が中心の娯楽系ラジオ(2009年3月〜2012年2月)。情報系のラジオとしてはOko Moskvaが最も有名。その聴取者は一日平均90万人ともいわれ、多くのジャーナリストや中間層がこのラジオを聞いている。

## ③ インターネット

2011年末、ロシア連邦通信・マスコミ省のショーゴレフ大臣が、ロシアにおけるインターネット利用者の数が7千万人に達したと発表した。これはロシアの総人口のおよそ半数にあたる。インターネット利用者のうち、ソーシャルネットワークを利用している人の割合が2010年は53%であったが、2012年では82%に増加。メドベージェフ前大統領もツイッターを活用しているし、プロガーが世論を動かすなど多くの場面でソーシャルネットワークの影響力の大きさを実感することが多い。

## ウラジオストクでデビュー?

ウラジオストクでは、ローカルテレビ局2か所で研修。ニュースの取材現場に同行したり、番組やリポート制作を手伝った。



スタジオでロシア人アナウンサーと

ロシア人記者は、自分の取材先あるいはプレスリリースをもとに取材したいテーマを選ぶ。日本のような記者クラブはないが、政治や裁判などについては担当記者がいる場合が多いという。

全ロシアテレビラジオ放送会社ウラジオストク支局では、「ウラジオストクと日本人」をテーマに独自のレポート制作を命じられる。何のつてもない中、ロシア人の日本研究家に電話をかける。すると一人の日本人作家が新作の材料集めのためウラジオストクに来るという情報が手に入る。後日、この作家とコンタクトをとり、彼が日本人ゆかりの場所を訪ねる様子やロシア人研究者との交流

などを撮影、インタビューを交えて何とかリポートにすることができた。その後スタジオ出演もしたらどうかという上司の無茶振りを受け、ロシアでスクリーンデビューをすることになる。ローカル放送とはいえ、外国人研修生をニュース番組に登場させてしまうのだから、ロシアの放送機関は肝が据わっている。

## いざ モスクワへ

2か月を過ごしたウラジオストクを離れ、11月後半から研修の舞台はモスクワに。研修先は、ロシア発の国際テレビ放送局ロシアトゥデイ、国際ラジオ放送局ロシアの声、独立系ラジオ局コメルサントFM。

ロシアトゥデイは、外国に住む外国人にロシアの視点を伝えるため始まった国際放送局。24時間のニュース番組で、英語のほか、スペイン語とアラビア語での放送も展開している。ここではスタッフのほとんどが英語とロシア語のバイリンガル。筆者が同行した Prime Time Russia という情報番組の取材では、ロシア人ディレクターとアメリカ人リポーターが協力して、取材・制作していたのがとても印象的だった。

ロシアの声は、1999年に放送を開始した歴史あるロシアの国際ラジオ放送局。旧ソ連時代はプロパガンダ放送を目的としていたが現在はロシ

ア関連のニュースのほか国際ニュースに関するロシアの視点、ロシア文化や社会について伝えている。とはいっても、ニュースはかなり政府寄りの視点で書かれていることが多いというのが筆者の印象。

日本語放送もあり、日本人翻訳者兼アナウンサーとロシア人職員が共同で働いている。筆者自身も見学初日に読み手の一人として参加させてもらった。ニュース以外の番組内容については、司会を務める日本人アナウンサーの裁量に任せている部分が多く、ある意味とても緩やかな編集方針に驚いた。

コメルサントFMは、2年前に設立された新しいFMラジオ局。多くのメディアが政府の影響下にある中、数少ない独立系メディアの一つ。ここで最も印象的だったのが1日3回行われるスタッフミーティング。スタッフは全員、自分が担当する時間帯のミーティングに参加し、放送で取り上げたいニュースや話題を準備する。そして参加者全員で議論し、どのニュースを取り上げるかを決める。ロシアの放送局にしては極めて民主的なやり方といえる。

ロシア下院議会選挙と抗議集会についての報道

2011年12月4日はロシア下院投票日。この下院選をきっかけに公正

な選挙を求める抗議活動が展開する。

筆者も2011年12月、2012年2月に行われた抗議集会の現場に足を運んだ。現場には2〜3メートルおきに警察官が立ち、大きな混乱は見られない。参加者は老若男女様々で、多くの人が《公正さ》を表す白いリボンや白い花を身につけていたのが印象的だった。演壇には次々にプレゼンターが登場し、自分たちの思いをぶつけていく。「プーチンのいないロシアを」という地響きのような訴えを聞いた時には、ロシア人の持つ潜在的なパワーを感じて圧倒された。



2012年2月モスクワで行われた抗議活動

当初これらの抗議活動についてロシアの国営メディアはほとんど取り上げていなかった。一方で独立系テレビ局やラジオ局は現場から中継を行い、生放送の討論番組を展開。ネット上では、都合の良い報道しかない国営メディアへの批判も展開されていた。

我々ジャーナリストは常に《客観的な報道》というのを目指す。しかし100%客観的な報道など本当にあるのだろうか。一連の抗議活動とマスコミの動きを通じて感じたのは、情報を伝える側も享受する側も一つの同じ出来事でも立場が違えば違う報道がなされるというのを知り、より多角的な見方をするのを忘れてはいけないということである。

ブラハからロシアを伝える  
ブラハにはアメリカ議会が運営する国際ラジオ放送局ラジオフリーヨーロツプがある。冷戦時、鉄のカーテンの向こう側に対し西側諸国の情報を提供するため設立され、現在はロシア国内をはじめ国際的なニュースについて、ロシアの国内メディアとは一線を画す視点で伝えている。およそ100人のスタッフがいますがそのうち100人はモスクワ、30人がブラハで勤務している。

ブラハ本部で働く記者のレベルの高さは、研修先の中でも最高級というのが筆者の感想でもある。研修の指導を担当してくれたアンドレイ・シャーリー氏の「ジャーナリストは自分の口から批判を言うものではない。取材相手を通じて、自分の意見を反映させるものだ」という言葉が何より心に残っている。

終わりに

今回の研修を通じて立場の異なる多くのジャーナリストと出会ったが、彼らに共通して言えることは、一人一人がジャーナリストとして自分なりの信念を持ち仕事をしているということである。仕事のやり方などは日本に比べればまだまだ緩い部分が多いが、ジャーナリスト一人一人の意識の高さは日本以上ではないかと感じるが多かった。その背景には、ロシアでは《会社》よりも《個人》が重視され、ジャーナリストが自分の主張をインターネットやその他媒体で比較的自由に発言できることがあるように思う。しかしその結果、ロシアおよびロシアのメディアにはいわゆるダブルスタンダードが存在すると言われている。今後ロシアと向き合い、ジャーナリストとしてロシアと付き合っていくには、彼らに負けないほどの揺るがない信念を持ち、ロシアなりの《ダブルスタンダード》を見分ける眼が必要だといえる。

(平13 NHK国際放送局)



ブラハ本部の  
アンドレイ・シャーリー記者と

## 動き出すかヘーチニコフと大山巖

渡辺 雅司

ガリバルジ軍の副官をつとめ、ジュネーブの「若き亡命者」グループのなかでもとりわけゲルツェン、バクーニンの信任を得ていたレフ・メーチニコフ(1881-88)が、いかにして開設まもない東京外国語学校の教授になったか? 斡旋したのは時の文部卿木戸孝允、文部大輔田中不二麻呂(ともにメーチニコフとはすでにジュネーブで親交があった。)だが、本来の招聘者には、征韓論に敗れ、下野しなければ西郷隆盛がなるはずだった。

ではどのようにして、このような雇い入れが可能になったのか? ここで登場するのが当時陸軍少将ながらジュネーブに単身留学していた大山巖(そのころは弥助と言った)である。(メーチニコフと大山巖)、これはわたしが30年来温めてきた「評伝メーチニコフ」の重要な章となるはずだ。そしてこの二人の親交には、わが国を代表する知性といってもいい鶴見俊輔、伊東光晴両氏もつとに関心を示してくれていた。鶴見さんは近著「思い出袋」(岩波新書)で、また伊東先生は今年は

じめに出版された「日本の伏流(筑摩選書)の第一章で詳しく取り上げてくださったのである。わたし自身ジュネーブには一九八九年に10日ほど滞りし、現地調査を行ったが、それまで史料で知りえた以上の新発見はできず、この章に関しては足踏み状態であった。

しかし歴史とは思ってもかけない方向から開けてくるものだ。今年の6月、なんと大山巖の曾孫に当たる久野明子氏とお会いすることになったのだ。きつかけはかつて伊東光晴ゼミで同輩だった山中輝雄氏(E43)からの一通のメールだった。それによると日米協会の理事をされている同じく伊東ゼミの先輩で、わたしの野球部の先輩でもある柳沢享氏(E33)を通じて日米協会の副会長の久野さんがわたしに会いたがっている旨が記されていた。久野さんが「鹿鳴館の貴婦人大山捨松の生涯」(中公文庫)の著者であることだけは存じ上げていた。

お互い面識がないので、御茶ノ水駅前交番付近で本を持って待ち合わせたわたしたちは、

山の上ホテル旧館のレストランで食事をしながら話すことにした。「ここは鶴見俊輔さんの定宿ですね」と久野さん。鶴見さんの前出の本のことを話そうと思った矢先のことだったので、面食らっていると、「鶴見さんとは親戚なので」とこともなげに言われる。いわゆる良家の出の方には、銜いとか屈託がない。わたしはこれまでに幾度もそういう人たちに出会ってきた。以後わたしたちは初対面とは思えないうちとけた雰囲気ビールを飲みながら時間を忘れて歓談したのだった。「昨日は、興奮しっぱなしの先生との初対面でした。大山巖とメーチニコフとの出会いが百四十年後のわたし達を結び付けたと考えると、壮大な時間の流れを越えた不思議な力を感じざるを得ませんでした」と翌日の久野さんからのメール。

なぜわたしたちはそんなに興奮したか? 実はわたしの妻の母方の曾祖父は三田藩主九鬼隆義、哲学者九鬼周造の父九鬼隆一は分家にあたり、次官として文部省の実権を握っていたのだから、メーチニコフの雇い入れに積極的に動いたはずである。二人が親密だった証拠に、一八七八年パリ万国博覧会

の全権代表として渡仏した九鬼は、古代日本文学関係の文献をメーチニコフに届けている。これに対しメーチニコフは日本からの帰国後出版した「L'empire Japonais」(1881「大日本国」と記す)の補遺で、九鬼に深甚なる謝意を表しているのだ。久野さんとお話していると、歴史上の人物が身内の話として迫ってくるようなのだ。

「大日本国」が出たところで、本題に入ろう。あるスイス人がこの「大日本国」のコピーを読み、そこに驚くべき事実を「発見」したことから話は始まる。このスイス人の名はフィリップ・ニーゼル、一九四七年生まれで京都大学大学院で国際公法を学んだ法律家、実業家。ジュネーブと京都に住まいを持ち、千宗室から「宗翠」という茶号をもらい、「平成の数奇者」シリーズにもとりあげられたという大の親日家である。

彼によると二〇一四年が日瑞両国の修好百五十周年に当たるそうだ。そこで関西日本・スイス協会の副会長でもある彼は、ジュネーブにはじめて留学した日本人の一人として大山巖に着目していたところ、日本から持ち帰ったコピーの中にメーチニコフの「大日本国」

を発見、その序文に「薩摩出身のサムライで、高い位の武官に日本語を習った」との記述に出会い、直感的にこの武官が大山だと確信し、大山の下宿先の住所がわからないかと、日米協会を通して久野さんに問い合わせてきたのだった。

しかもこの段階ではニーゼルの視野には、わたしのメーチニコフ研究は入っていない。だからこそというべきか、氏は想像の翼を広げ、こんな仮説(今)を立てたのである。大山にフランス語を教えたのは、メーチニコフらしい、また大山はロシア語も学んだのでは？この仮説の極めつけは、一九九八年二月にチューリツヒの骨董市で氏自身が購入したという脇差である。この脇差には備前国住長船祐定天正二年八月と銘が刻まれているという。

「大日本国」をひもときながら、画家でもあるメーチニコフ自筆の何枚もの挿絵に見惚れていた彼の目は一枚のペン画に釘付けになる。なんの説明もないこの挿絵が彼の手元にある脇差の柄の部分にそっくりではないか。瞬間的に彼は直感する。この脇差はメーチニコフのものであり、おそらく弟子の大山蔵からもらったか、日本滞在中に自身購入したものには違

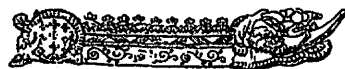
いないと。そこから「貴女の曾祖父様の日記にわたしの直感を裏づける明確な記述がありませんか」と久野さんに問い合わせてきたのである。

「大山がこんなちやちな脇差を贈るわけはないわよね」と久野さん。「そうですね」と相槌をうちながら

もわたしは忘れもしない一枚の写真のことを思い出していた。左手に扇子、右手で脇差の柄を握り締めた精悍なサムライ姿のメーチニコフである。ニーゼル氏は自分の脇差を、挿絵に重ねてみた上での推測だとまで書いていた。もしこの突拍子もない推測が当たっていたとしたら・・・



メーチニコフに出会う前のスイス家庭教師の名前はわかっていて、おそらくその一人からの忠告。「あなたの雇入れた個人教師はロシア政府のおたずねものである。あなたは日本政府の高官と聞か、あなたの不利益とならないか。大山



は答えた。自分は今は政府の高官である。外国語教師として頼んだこのロシア人の仲間が、やがて政権の座につかないと誰が言えよう(鶴見俊輔、前掲書)鶴見さんはつづけて「維新を通った人には革命精神があるというのが、大山蔵について古在由重の評価だった。メーチニコフ著『回想の明治維新』(渡辺雅司訳、岩波文庫、1982)とあわせて思いだされた」と書かれている。古在氏がわたしのメーチニコフの訳を激賞していたとかつて仄聞していたので、この記述には思い当たるものがあった。

大山の住所はわからないが、メーチニコフの住所ならつきとめていた。Maison Fernan route Frontenez, Meitnikoffの義理の娘の友人で、彼の経済学の公開講座(一八七二年のこの講座で、なんとメーチニコフは露訳が出たばかりのマルクスの「資本論」の講義までしていたのだった)を聴講し、ついにはメーチニコフ家に下宿するようになる後の作家ネリードワ(ツルゲーネフやチェーホフと親交がある)の回想記(1924)がモスクワのアーカイブには残されており、それによると上記の住所のメーチニコフ家には大山だけでなく、何人

かの日本人が入り込んでいたようで、漢字の練習をするメーチニコフやその習得のはやさに彼らが驚嘆する様子が描かれている。

ニーゼル氏は大山の下宿先が判明した暁には、その家の壁に大理石の銘板を設置することを計画している。しかしメーチニコフという「新発見」に日本通の氏は大いに打たれているようで、持ち前の直観力を發揮して、思いもかけぬ新史料が発掘されないとも限らない。

山川捨松の伝記を書かれた久野さんは大山蔵の先妻の末娘留子の孫に当たり、大山が捨松と再婚したときには留子は幼かったので、彼女を実の母親と思っていたらしい。

ちなみに徳富蘆花の大衆小説「不如帰」の悲劇のヒロイン浪子のモデルは長女の信子である。ハーフマイル・ビーチと呼ばれるきれいに弧をえがく返子海岸の途切れるあたり、岩礁の上に波に洗われる独り立つ「不如帰の碑」を車窓から望むにつけ、わたしは久野さんとの語らいを思い出し、メーチニコフと大山蔵が今、新たに動き出すよううれしい胸騒ぎを覚えるのである。

## 『大学のロシア語』完成に向けて

沼野 恭子

「東京外国語大学のロシア語専攻の授業で使用することを主たる目的とするロシア語教科書を作ろう」ということで私たちが最初に顔合わせをしたのは、二年前の二〇一〇年春。めざすは、文法と練習問題と実践的な応用問題を有機的に組み合わせ、日本人教員とネイティブ教員全員が連携して用いることのできる包括的な「統一ロシア語初級教科書」である。

## 1. 作成はまだまだ現在進行形

初めは文字とおり雲をつかむような状態だった。全体のコンセプトをどうするか、どのような順序で文法項目を出すか、各課をどのような構成にするか。発音練習は？ 語彙コントロールは？ 読み物は？ その後(その年五月に八ヶ岳で新入生オリエンテーション合宿をしたときも含め)何度も協議を重ねてこれらの課題を検討しながら、二〇一二年四月使用開始を目標に少しずつ作業を進めた。最終的にタイトルが『大学のロシア語』と決まったのはようやく今年になってからだ。

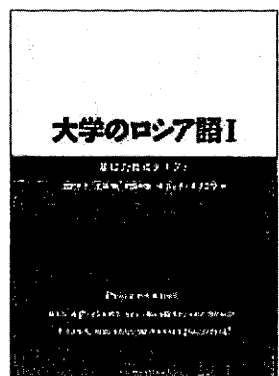
まず匹田剛先生が文法項目の叩き台を書き、前田和泉先生が調整しながら練習問題を加えていき、イリーナ・ダフコワ先生が発音や実践の練習問題の作成とロシア語の校正を担当してくださった。折よく東京外国語大学出版

会が「ロシア語教科書を出しませんか」と声をかけてくださったので、編集面では出版会の竹中龍太さんの全面的なバックアップを得ることができた。心強かったのは、私がNHKテレビのテキストを書いたときにさんさんお世話になった日本放送出版協会の小林丈洋さんが校正と編集に加わってくれたこと。単語帳等の作成には大学院生の光井明日香さんと佐山豪太さんが協力してくれた。私自身はただの「音頭取り」でたいしたこと何もしないが、このメンバーのチームワークは最高(！)と誇りに思っている。

とはいえ、時間的な制約から二〇一二年春の刊行にぎりぎり間に合ったのは第一巻のパイロット版のみで、第二巻はまだ完成していない。目下、第一巻のパイロット版と第二巻のプリントを実際に授業で用いてその「使い勝手」の感触を確かめながら、全二巻完成版をそろえて来年春に刊行すべく作業を続けている。つまり教科書作成はいまだ現在進行形なのである。

## 2. どのような教科書なのか

『大学のロシア語』(全二巻)がどのような意図で作られたような特長があるかは第一巻の冒頭に記してあるが、ここで簡単に紹介しておく。



どちらの巻も二十八課から成り、それぞれ別の課が対応している。例えば、第一巻第六課で勉強したことは第二巻第六課で反復・応用練習するよう構成されているということだ。

第一巻では、文字と発音について説明した後、ロシア語文法を網羅的にカバーし、できる限り丁寧な解説を加えている。きれいな二色刷りで、変化語尾やとくに注意を要する部分を赤字にして目立たせた。また文法事項の定着をはかるため項目ごとに簡単な練習問題を添え、巻末に解答を載せてある。

先に記したとおり、主として本学でロシア語を専門的に学ぶ学生たちを念頭に置いて作成しているが、ロシア語を独習する方にも使っていただけという配慮した。既習文法項目へのリファレンス(ページ数の参照)を多くし、巻末に詳しい文法表を配し、単語帳にロシア連邦教育科学省が認定するロシア語検定試験(TPKI)の「基礎レベル」の語をすべて収めたのもそのためである。

第二巻は、各課の最初に発音練習を置き、日本人が苦手とする発音を克服できるように工夫してある。さらに、第一巻で学習した文法の反復練習のみならず、実際の会話にスムーズに移行できるようにコミュニケーションアプローチを意識した課題を多数収めた。この最後の部分は、主としてネイティブ教員による教室での利用を想定している。

## 3. 楽しく学ぼう

難解だと思われるロシア語をなるべく楽しく学べるようにしたいというのが私たちの心からの願いだ。そこで、表紙はシンプルながらカラフルな色を選んだ。第一巻を赤と白の二色にしたので、第二巻は青と白の「色違い」にしたいと考えている。可愛らしいイラストや事項のロゴマークもお楽しみいただきたい。

第一巻の表紙には次のようなロシア語の謳い文句が記されている。何課まで勉強したら意味がわかるようになるか、勉強中の人は挑戦してほしい。

Русский язык, как и русский язык,  
всепонятный.

Глупа, насколько его красота!

完成版は市販されることになっている。ロシア会員の皆様にもぜひ二〇一三年四月以降、書店で手に取っていただければ幸いです。

(昭55 教授・現代ロシア文学)



二〇一一年度ロシア語劇『知恵の悲しみ』を振り返って

峯岸 永一

【作品について】

ロシア最初の近代劇であり、当時外交官だったアレクサンドル・グリーブエードフ(1809-1863)が手掛けた喜劇である。彼の作品はロシアのリアリズム文学の先駆けとなったといわれている。19世紀初頭のロシア社会を鋭い目線で見つめ、革命的なデカプリストらと保守的な貴族階級の人々の間の闘争が展開される作品である。劇に登場する全ての形象が、当時のロシア社会で問題となっていたこと全てを反映している。主人公チャーツキーは3年にわたるフランス留学を経てモスクワへ帰国するもかつての恋人であったソフィアの心は変わってしまった。また、彼はモスクワ社会の雰囲気と違和感を感じ、かつての友人に会っても心を通わすことはなかった。ついには彼は狂人となり、モスクワを飛び出してしまふことになる。主人公のチャーツキーだけでなく作品の舞台である貴族邸の主フアームソフ(ソフィアの父)や、執事のモルチヤリン、小間使いのリーザ、スカラズープ大佐など全ての登場人物がロシア社会を鏡映したのとして描かれている。この作品は現代でも親しまれ、多くの舞台作品が上映されている。僕もロシアに行った際実際にこの作品を見てみて、非常に心を打たれた。



【作品にあたって】

語劇は「自らの専攻語を二年間学習した集大成を劇を通じて発表するもの」と捉えている人もいるだろう。僕も最初はそう感じていた。しかし、語劇は普通の劇とは違うことから二つのロジックをもとに作品を仕上げようと考えた。一つは「語」についてである。観客の中でロシア語を理解している人は少ないだろう。確かに僕は言語を学んで来ているわけではない。なので「せっかくならば観客に、ロシア語ではなくロシアというものを伝えたい」というのが舞台・脚本演出の基本理念だった。ネイティブの方々と何度もコ

ンタクトをとりながらロシアの衣装や音楽、そしてセリフに至るまでロシアの要素をベースに考えた。そして二つ目が「劇」である。身振りや動きはもちろんのこと、字幕や衣装、舞台セッティングに至るまで観客視線で演出を考え、観客が目や耳でも楽しめるように仕上げた。これら二つの考えをベースに作品作りに挑んだ。

【作品完成までのプロセス】

最も苦労したことは脚本作りである。原作は3時間弱かかるため、作品を80分にしなければならなかった。そのため、セリフのカットや場面つなぎの作業は、本番1週間前まで変更することもあった。それでもキャストの人たちはタイトなスケジュールの中、セリフを覚えることに励み、またスタッフの方々も積極的に行動してくれた。

語科全員が一丸となって語劇に取り組んだ。稽古にあたり多くの問題にも直面した。9月は僕自身がロシアに1ヵ月短期留学し劇の練習を役者各自に任せるということとなったが、メインキャスト6名を筆頭に稽古練習に励んでくれた。10月までに台本を暗記するという目標だったが、多くの役者が台本を話せず、11月までかかった。主役であるチャーツキーを演じた千葉元や作品の舞台となる貴族邸の主フアームソフ演じる田中祐真、二人のセリフは他の役者と比べて特に長かった。また、全体リハーサルでも毎回とらぬところろに小さなミスが生じ、本番前のリハー

サルでも課題を残すものとなった。しかし、演目本番ではスタッフも含め全てが順調に進み、素晴らしい舞台にすることができた。表向きでは僕が監督として動いていたのだが、語劇の事務仕事を担当した代表の萩原真由子の支えがなければ、ここまでの作品になることはなかったと思う。また、作品を作るにあたって協力してくれた先生方、一昨年の語劇監督や先輩方、そしてキャストやスタッフを含めた語科のみんなの力のおかげで良い作品になることができた。もちろん見に来てくださった方々にも今一度感謝したい。今年も後輩たちがロシア語劇に向けて頑張っているのをエールを送りたい。(学部3年)

舞台・脚本・演出監督：峯岸永一  
代表：萩原真由子 舞台監督：佐々木信  
会計：和田真美  
キャスト：千葉元、田中祐真、吉田純音、  
鶴田さおり、坂田礼  
松山良賢、ほか13名  
スタッフ35名

二〇一一年度ロシア語専攻語劇の案内  
日時：11月25日(日)  
演目：『桜の園』アントン・チェーホフ  
場所：アゴラグローバル  
かの有名な劇作家チェーホフの戯曲です。  
桜の園の競売を軸に織りなされる人間模様をご覧ください。

## 府中だより

鈴木義一

四〇年近く外語大の教壇に立たれていた中澤英彦先生が、昨年度をもって定年退職された。三月三日には最終講義が行われ、「時を紡ぐ——竹の響に倣って」と題して長年研究してこられたロシア語動詞のアスペクトを中心にいつもの語り口で講義をされた。会場の一五教室は同僚、在学生、卒業生であふれ、講義に聞き入った。



中澤英彦先生最終講義  
「時を紡ぐ——竹の響に倣って」

続いていつものようにイベントの報告である。昨年十二月六日には、中野健三基金シンポジウムを例年通り開催した。第十六回の昨年は、河東哲夫氏を講師に招き、「ロシア」から考える——人間を、歴史を、あなたの仕事を、そして宇宙を」というテーマであった(司会・沼野恭子教授)。河東氏は、在ロシア大使館公使、ウズベキスタン大使などを歴任された元外交官である。在任中に「嵯峨冽」の筆名で刊行した『ソ連社会は変わるか』(サイマル出版)の著者として知られており、退任後は『意味の解体する世界へ』(草思社・二〇〇四年)などの著作がある。最近では『Japan-World Trends』というブログでも論評を発信している。シンポジウムでは、専門分野の政治・外交のみならず、ロシア文学や文化・芸術にも及んで「ロシア」を学ぶ意義を論じた。

今年三月二〇日には、科学研究費のプロジェクト(ポスト・グローバル時代から見たソ連崩壊の文化史的意味に関する超域横断的研究)の国際シンポジウムが開催された。昨年はチェルノブイリ原発事故から二五年、ソ連崩壊から二〇年の節目であり、東日本大震災から一年という時に開催されたシンポジウムは、「にがよもぎの予言——チエルノブイリの悲劇とソ連崩壊(二〇年

というテーマであった。第一部「チエルノブイリ、今」ではチエルノブイリ原発事故の際に事故処理にあたった作家・ジャーナリストのセルゲイ・ミールヌイ氏をウクライナから招き、第二部「ソ連崩壊二〇年を考える」では、司会の亀山学長とともに、塩川伸明、沼野充義、鈴木義一の三名の討論者によるパネルディスカッションを行った。

新学期に入って五月二四日には、スラヴ言語学者の横山オリガ氏(UCCLA教授)の講演があった。リレー講義「表象文化とグローバルゼーション」の授業のゲストとして、「言語のグローバルゼーション」と題して講義を行った。

今年四月、いよいよ学部改編による「言語文化学部」と「国際社会学部」の二学部による新体制が始まった。昨年までに入学した学生がすべて卒業すると、「外国語学部」は存在しなくなる。今年の新入生からは、言語または文学・文化を中心に学ぶ言語文化学部が、地域研究と国際関係の社会科学系を主体とする国際社会学部が、いずれかを入試の段階で選択することになった。

ただ、一・二年度の「地域言語Ⅱ」(旧学部の「主専攻語」や「地域基礎科目」は両学部の学生が合同で学ぶことになっており、当面は大きな違いは見られ

ない。ロシア語は両学部混在で語学科目のクラス分けを行っており、オリエンテーションのイベントも合同であった。とはいえ、三年次以降の専門科目に進むと両学部の違いが顕在化してくるのは明らかである。東京外国語大学の学生は今後、「学部」と「地域言語(専攻語)」のどちらのアイデンティティを強く意識するようになるだろうか。このことは、「外語会」や「ロシア会」の将来にも関わる。

学部改編のもう一つの目玉は、「ベنگガル語」と、「アフリカ」・「中央アジア」などの地域枠の新設である。ロシアの隣接地域である「中央アジア地域」は、小松久男教授を東京大学文学部から招き、新任の島田志津夫講師(昨年一〇月着任)とともに、入学定員二二名の地域枠として発足した。学生たちは、一年次は「ロシア地域」の学生と一緒にロシア語を学ぶが、二年次になるとロシア語・コマ、ウズベク語・コマとなる。言語教育の点でも新しい試みが始まる。

新学部の体制が始まった今年度だが、年度末には高橋清治教授が定年を迎え、亀山郁夫学長の任期も満了となる。今年はまさに転換の年である。

(教授・ロシア経済史)

会計から

ロシア会の会費は、大学全体の同窓会組織である外語会の会費とは別立てになっており、金額は以下のいずれかをお選びいただけます(※会報送付の封筒の宛名頭部に赤字で○印のある方は終身会費納入済みのため、払込票は同封してありません。払込票が同封されている方は、会費の納入をお願いいたします)。

・終身会費三万円  
(ゆうちよ銀行から振込む場合、手数料は窓口三三〇円 ATM二九〇円)  
・年会費二千元  
(同、窓口二二〇円、ATM八〇円)

東京外語ロシア会 2011 年度収支

(2011年4月1日~2012年3月31日 単位 円、監査実施済)

1. 収入

終身会費 (9名 単価3万円)	270,000
年会費 (37名 単価2千円*)	94,000
寄付金	820
郵便貯金利息	481
合計	395,301

\*注: 年会費には3千円の納入1件、5千円の納入1件、1万円の納入2件あり

2. 支出

会報作成費 (印刷製本作業代)	147,210
会報郵送費	156,199
会報宛名ラベル (支払先: 外語会)	17,100
霊園管理料 (ミチューリン先生お墓)	3,600
会議室利用料 (9月1日幹事打合せ)	3,000
語劇支援金	50,000
払込手数料 (3件)	1,050
ロシア会懇親会への補助	133,000
合計	511,159

3. 差し引き計算および繰越金

差引不足金	▲ 115,858
前期繰越金	2,083,759
次期繰越金	1,967,901

ロシア会懇親会収支

(2012年1月21日実施 単位 円)

1. 収入	出席者会費	187,000
	(卒業生 59名×単価3千円、在校生 5名×単価1千円)	
	本会計からの補助	133,000
	合計	320,000
2. 支出	料理代	320,000
	合計	320,000

お手持ちのゆうちよ銀行総合口座からATMを利用して振込む場合、平成二四年九月三十日までは手数料が無料となります。詳しくはゆうちよ銀行のホームページをご覧ください。またはゆうちよ銀行各店舗にお問い合わせください。

昨年度の収支状況は別表の通りです。収入合計は前年比約四万六千円増となりましたが、年間収支は十一万円強の赤字で、次期繰越金は二百万円を割り込みました。こうした財政事情を考慮し、今年度以降は懇親会への補助を減額し、学生の語劇への補助金を廃止することになりました。何卒ご了承ください。

ロシア会の活動は、会報作成、会計管理、総会・懇親会の開催など、全てボランティアで運営しております。会の活動基盤を維持、強化するため、皆様方の一層のご支援をお願い申し上げます。終身会費及び年会費の納入は、総会・懇親会の会場でも受け付けております。また、会の運営に協力してくださる方も随時募集中です。

前回の総会・懇親会では、新たな試みとして、賞品付きのクイズやゲームを企画し、世代を超えた交流を図りました。就職活動中の学生が、希望する業界で働く卒業生から話を聞くなど、同窓会組織ならではの光景も見られました。幅広い世代が楽しめるような会

にすべく、幹事一同これからも努力してまいります。

◆二〇一一年度 終身会費納入者  
今年度に三万円一括納入された方のお名前は以下の通りです(送金到着順、敬称略)。

- 武藤由理子、前田理絵、石毛順子、
- 福本優子、小野なつ子、國廣陽子、
- 山本毅、山内茂子、鳥山華子、
- 匹田剛。

ロシア会会計 前田和泉 計十名

# 二〇一二年 度 ロシア会総会・懇親会のお知らせ

今年度のロシア会総会・懇親会を左記により開催します。  
年に一度のロシア科全窓生の集まりです。  
各年度、各クラスでお誘い合わせの上、是非、ご出席下さい。

日時 二〇一二年十一月十日(土)

午後一時半から 総会

午後三時半から 懇親会

会場 日立金属・高輪和珥館 一階 蘭の間

JR・京急 品川駅高輪口から徒歩 10分  
東京都港区高輪4-10-56  
(右下の地図をご参照ください)

## 講演

「超大国ソ連はなぜ解体したのか?その原因を探る」

ロシア問題評論家  
中澤孝之氏

## 懇親会

会費 四千元(卒業生) 千円(在学生)

同封の返信用はがきを二〇一二年十一月二日必着でご投函を。

## ロシア語専攻専任スタッフの紹介

二〇一二年九月現在のロシア語専攻の専任スタッフとその専門分野をご紹介します。

高橋清治教授  
ロシア史

鈴木義一教授  
(ロシア・グルジアの民族問題)

沼野恭子教授・専攻代表  
ロシア文学・ロシア文化

匹田剛准教授  
(現代ロシア経済・比較経済史)

前田和泉准教授  
ロシア文学・ロシア文化

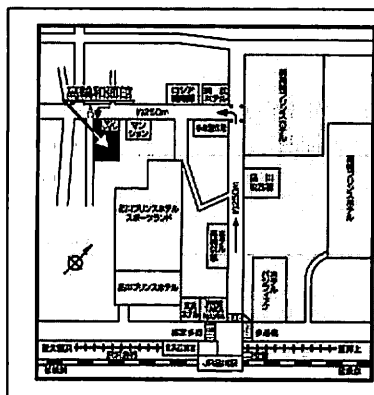
伊リーナ・ダフコワ客員准教授  
ロシア語学(ロシア語文法)

イリーナ・ダフコワ客員准教授  
ロシア語教育法

なお高橋先生はこの三月をもって  
定年退官されます。

この他に非常勤講師として、東井ナ  
ジェーユダ、ナターリア・イワノワ、  
エレオノーラ・サプリナ、浜野アキラ、エ  
カテリーナ・グートワ、エカテリーナ・ユ  
ムコーワ、原ダリヤ、アンナ・プガーエフ、  
阿出川修嘉、加藤栄一、古賀義頭、杉  
谷倫枝、広岡直子、古川哲、丸山由紀  
子、八島雅彦、吉岡ゆきの諸先生がそ  
れぞれの専門で教えておられます。

ロシア会総会・懇親会 会場  
日立金属・高輪和珥館のきょうかん  
東京都港区高輪4-10-56



## 編集後記

会報15号をお届けします。  
夏の暑い最中、ご寄稿くださった皆  
様に感謝申し上げます。

巻頭にご寄稿くださった中澤孝之氏  
は記者の経験を経ての研究者で十一  
月のロシア会でも講演いただきます。  
興味深いお話を聞けるよい機会です。

住所変更などのため、この会報が  
届かない方がたと存じます。その  
ような方をご存知の方はメールか  
(roshtakai@tufs.ac.jp)  
「東京外語ロシア会」とwebで検  
索し、「お問い合わせ」からご連絡い  
ただくようご協力ください。

(平 16 山田智子)